

Title	マルクスと労働貴族(上) : ロイドン・ハリソンの所論との関連で
Sub Title	Marx and the labour aristocracy : in special reference to a treatment by Royden Harrison
Author	松村, 高夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1983
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.76, No.5 (1983. 12) ,p.613(1)- 628(16)
JaLC DOI	10.14991/001.19831201-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19831201-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マルクスと労働貴族(上)

——ロイドン・ハリスンの所論との関連で——

松村高夫

目次

- I はしがき
- II マルクスの1850年代初期の労働貴族観
 - 1 マルクスとE.ジョーンズ
 - 2 「新型」労働組合に対する批判的見解
 - 3 生産協同組合に対する批判的見解 (以上本号)
- III マルクスの1860年代中期の労働貴族観 (以下次号)
 - 1 インターナショナル「創立宣言」とR.ハリスンによる評価
 - 2 ジェンタ対ポッター派の対立とマルクス
- IV 結びに代えて

I はしがき

R.ハリスンは、慶應義塾大学での最近の講演(1983年7月12日)「労働貴族論争について」のレジユメの冒頭で、「ヘンリー・ベリングが *Popular Politics and Society in Late Victorian Britain* (1969) を出版して以来、『生活水準論争』は労働貴族論争にとって代られる傾向がある」と書き、講演の結びに、「労働貴族論を否定する人は少数になった。労働貴族概念は、政治的立場の差異や世代間の対立感情をこえて、歴史的考察の有益な概念である。必要なことはこの概念の否定ではなく、そのいっそうの精緻化であり、最近ますます労働貴族論は豊富化されている」と述べた⁽¹⁾。もとよりここでいう労働貴族論争とは、植民地からの超過利潤を基盤として帝国主義本国の労働運動の右傾化を説明するレーニ的規定の労働貴族を直接的には対象としていない。この論争は、19世紀中葉に生じたイギリス労働運動の体制内化ないし右傾化の原因の一部(すべてではない)を説明するものとして、ホブズボームが1954年に発表した論文「*The Labour Aristocracy in Nineteenth-*

注(1) 1983年7月に来日のさい東京で行なわれたR.ハリスン教授の4つの講演——「イギリスにおけるマルクス主義の伝統」(慶應義塾大学)、「労働貴族論争について」(慶應義塾大学)、「保守党は何故過去100年間優勢であったのか」(法政大学)、「サッチャー政権下の労働党」(一橋大学)——の要旨は、岡真人「ロイドン・ハリスン教授の東京講演」(『労働運動史研究会会報』, No. 6, 1983年10月)を参照されたい。

century Britain' に端を発する論争である。ホブズボームの「経済的分析」は、その後R.ハリスンの政治的分析に継承され、さらにR. Q. グレイやG. クロシックの社会的分析に発展していった。一方、H. ペリングやA. E. マッソンは、労働貴族概念は歴史研究にとって有害であり、マルクスが予言したようなプロレタリア革命がイギリスで生じなかったことをいい繕うためにマルクス主義者が鑄造した用語に過ぎないと主張した。そして、19世紀がすすむにつれて、労働者階級は、技術革新に伴う熟練工の没落の結果、ますます均一化していったとしたのである。⁽²⁾

その後、この労働貴族論争には様々な論者が加わり、この数年間にイギリス労働史学界の主要論争点の一つになってきた。⁽³⁾ 1979年のイギリス労働史学会 Society for the Study of Labour History の秋季大会の統一テーマは、「労働貴族論」であったし、⁽⁴⁾ 1981年には Studies in Economic and Social History シリーズの一冊として、R. Q. グレイの *The Aristocracy of Labour in Nineteenth-century Britain, C.1850-1914* が刊行された。しかしながら、このような論争のなかでも、当初のホブズボーム＝ハリスン対ペリング＝マッソンの論点は未解決のままである。それは、総じて、前者のグループが1850年頃を分水嶺とする労働界の非連続性を主張するのに対し、後者のグループはその連続性を主張するという歴史理解の相違が根底にあるからである。前者が悲観論者＝マルクス主義史家であり、後者が楽観論者＝非マルクス主義史家であるといってもよい。

だが、ヨリ詳細にみると、マルクス主義史家の間にも様々な労働貴族論がある。ホブズボームとハリスンの労働貴族論にしてもかなりの差異があり、決して両者はイコールではない。クロノロジ

注(2) Eric Hobsbawm, *The Labour Aristocracy in Nineteenth-century Britain*, in his *Labouring Men*, 1964. 鈴木幹久、永井義雄訳『イギリス労働史研究』、1968年、ミネルヴァ書房に収録。Royden Harrison, *Before the Socialists*, 1965. R. Q. Gray, *The Labour Aristocracy in Victorian Edinburgh*, 1976. G. Crossick, *An Artisan Elite in Victorian Society: Kentish London, 1840-1880*, 1978. Henry Pelling, *The Concept of the Labour Aristocracy*, in his *Popular Politics and Society in Late Victorian Britain*, 1968. A. E. Musson, *British Trade Unions 1800-1875*, 1972. A. E. Musson, *Trade Union and Social History*, 1974. なお、以上の労働貴族論争は、松村高夫「19世紀第3四半期のイギリス労働史理解をめぐる——労働貴族論と「新型組合」論を中心にして——」(上) (『日本労働協会雑誌』, No. 224, 1977年11月号) で要約的に紹介されている。

(3) E. Hopkins, *Small Town Aristocrats of Labour and their Standard of Living, 1840-1914*, *Economic History Review*, 28, 1975. T. Tholfsen, *Working-Class Radicalism in Mid-Victorian England*, 1976. J. Field, *British Historians and the Concept of the Labour Aristocracy*, *Radical History Review*, 19, 1978-9. H. F. Moorhouse, *The Marxist Theory of the Labour Aristocracy*, *Social History*, 3, 1978. A. Reid, *Politics and Economics in the Formation of the British Working Class: a Response to H. F. Moorhouse*, *Social History*, 3, 1978. C. More, *Skill and the English Working Class, 1870-1914*, 1980. P. Joyce, *Work, Society and Politics*, 1980. T. Matsumura, *The Labour Aristocracy Revisited: The Victorian Flint Glass Makers*, 1983. R. Harrison ed., *The Labour Divided: Studies in Craft Regulation and Technological Innovation*, forthcoming. A. Reid, *Intelligent Artisans and Aristocrats of Labour: the Essays of Thomas Wright*, in J. Winter ed., *The Working Class in Modern British History*, 1983. なお、1976年以降の最近の労働貴族論争については、別稿を予定している。

(4) 1979年のイギリス労働史学会での労働貴族論をめぐる報告(ホブズボーム、グレイ、ムアハウス等)と質疑応答については、*Bulletin, Society for the Study of Labour History*, No. 40, Spring 1980 を参照のこと。筆者はこの大会の様子を、「1979年秋のヒストリー・ワークショップ大会と労働史学会に参加して」(『労働運動史研究』, 63, 1980年) という短い報告のなかで書いた。

一という基礎的事項についても、ホブズボームが労働貴族の「古典的時代」‘the Classic Age’とした1840年から1890年よりも、ハリスンのいう労働貴族の「黄金時代」‘the Golden Age’は短く、19世紀の第3四半期を指している。ホブズボームが、帝国主義段階におけるレーニンの規定の労働貴族との対比において労働貴族の「古典的時代」を規定しているのに対し、ハリスンは、チャーティズムの時代との対比において「黄金時代」を規定しているという差異があるのである。しかし、マルクス主義史家は、ペリング等から労働貴族論否定という挑戦状つきつけられると反批判に忙しく、このような相違点は究明されないままになった。この相違をハリスンとホブズボームの方法論の差異にまで深めて分析したのは安川悦子である。⁽⁵⁾しかし、本稿が扱うのは両マルクス主義史家の相違点ではなく、ハリスンの労働貴族論そのものである。

ハリスンの労働貴族論は、邦訳のために編まれた論文集『近代イギリス政治と労働運動、1860年—1970年』の序文で、簡潔に展開されている。ハリスンは、労働史上1850年頃に「圧倒的な変貌」があったことを、つぎのように描く。「19世紀の第3四半期には、チャーティズムは、その記憶すらも実質的に消滅したかに見えるほど完全に消え失せてしまった。協同組合主義者達は、新しい道徳的世界〔の理念〕を、購買にかけられた利益の分配というロッチデイルの原則に基づく小売の店商に変えてしまった。労働組合は、戦争の学校であることから、労働者が恭順で尊敬されることを学び、ストライキをやるよりも紛争を平和裡に解決することをいつでも好むことを学ぶための学校に変わった。労働組合指導者は、他の社会諸階級出身の『アウトサイダー』、靈感を受けた夢想家・民衆煽動家であることを止め、『インサイダー』、つまり労働組合や協同組合の新しい永続的な官僚制内部でそのビジネス能力と管理的機能を発展させた人々となった。そしてこれらの官僚制は永続した」と。⁽⁶⁾そして、1850年頃を境とする労働史上の対照は説明されねばならず、そのために労働貴族概念が有効であると主張する。「労働貴族の興起という概念は、私が思うには、前世紀の第2

注(5) その優れた論稿「イギリス労働史の伝統をめぐるホブズボームとハリスン——「労働貴族」論を中心に——」(安川悦子『イギリス労働運動と社会主義』、1982年、御茶の水書房、所収)のなかで、安川は、「ハリスンが、19世紀第3四半期の『労働貴族』の『英雄時代』をとりあげ、ウェップ夫妻よりのところでレーニンの問題提起をうけとめようとしたとすれば、ホブズボームは、レーニンよりのところでウェップ夫妻の問題をうけとめようとしたといえる。ウェップ夫妻とレーニンのイギリス労働史の伝統の評価にたいするハリスンとホブズボームの態度のこの微妙な(しかし基本的な)ちがいが、かれらのイギリス労働史研究の視座のちがいとなってあらわれる」(p. 316)と指摘している。そして、つぎのように主張する。「エンゲルス・レーニンの『労働貴族』概念をポジティブにうけとめるところから出発した」ホブズボームに対して、ハリスンは、「19世紀第3四半期のイギリス労働史の伝統を、ウェップ夫妻のように、トレード・ユニオンズの確立のゆえにポジティブなものともとめるのではなく、『なにをなすべきか』でのレーニンのように、まさにこのトレード・ユニオンズのゆえにネガティブなものともとめるのではなく、トレード・ユニオンズをになった『労働貴族』の階級意識の強さと階級闘争のひろがりのゆえにポジティブなものとも評価したのである」(pp. 314~15)と。

(6) R. ハリスン、田口富久治監訳『近代イギリス政治と労働運動、1860年—1970年』、1976年、未来社、日本語版への序論、p. 8.

四半期と第3四半期の間にイギリス労働運動を襲った変貌についての価値ある洞察を提供するものである⁽⁷⁾とするのである。

このような主張は、すでにかれの処女作 *Before the Socialists* (1965) の最初の章で展開されているが、邦訳論文集の序論は、ベリングによって労働貴族概念が否定された(1968年)のちに書かれているので、いっそうポレミカルである。ハリスンはいう。「もしベリング博士が、この概念をわれわれが使わないようにしたらいいというのであれば、彼はこの対照について別の説明を提供しなければならぬのであるが、そのことに失敗しているのだ⁽⁸⁾」と。ハリスンは、さらに、ベリングが労働貴族概念が役に立たないといいながら、一方で、マルクス主義者の主張とは反対にそれは進歩的であったとしてその概念を使用している、と批判する。

ハリスンによる労働貴族の政治的行動分析の帰結は、労働貴族が常にどこでも「反動的」勢力であったわけではなく、後述するように、19世紀の第3四半期には、特定の条件のもとで、進歩的役割を果たしたという点であった。つまり、それは労働貴族がその黄金時代をもったということである。ハリスンは、このことをつぎのようにいう。「労働貴族が反動的勢力であるか進歩的勢力であるかについての問題は、実際、いかなる単純な解答をも認めないような問題なのである。部分的にはそれは、考えられている時期と、論者が全体としての労働貴族層をとらえているか、それともそこから調達される特殊な部分を見ているかに、依存するのである。イギリス労働運動の形成期との関連においては、労働貴族は、それ自身の存在によって創り出された文脈においては、『進歩的』、つまり非特権諸階層の諸要求を進めるうえで指導的役割を演じた。他方、労働貴族層が存在しなかったとすれば、労働大衆が既存権力に対して、より統一された、恐るべき挑戦を行なうことができたであろうと推定する理由があるように思われる⁽⁹⁾。」ハリスンが労働貴族をその保守性と進歩性という二重の性格のなかで捉えようとした点は、注目する必要があるだろう。本稿では、マルクスの労働貴族観の変化を、1850年代初期と1860年代中期の二つの時期をとって、とくにイギリスの労働運動と協同組合運動の推移のなかに定置して比較・検討し、ハリスンの「労働貴族黄金時代説」との関連で、その変化がもつ意味について考察したい。

注(7) 『同上書』, p. 12.

(8) 『同上書』, p. 12. 同じ趣旨のハリスンのベリングに対する反批判は、すでに、ハリスンの書評 *Victorian Studies*, vol. 8, 1970 で行なわれた。もっとも、ベリングは、第2四半期と第3四半期の労働運動史上の変化を説明するのに労働貴族に代替する概念を提出する必要はなく、「一般的なヴィクトリア期のブームをもって充分である」と主張する(1978年4月の来日のさいの筆者の質問に答えて)。

(9) R. ハリスン, 『前掲書』, pp. 13~14.

II マルクスの1850年代初期の労働貴族観

1 マルクスとE.ジョーンズ

労働貴族概念は、通常エンゲルスが定式化したものとされ、マルクスはその概念を殆んど、あるいは全く、使用しなかったとされている。それは理由のないことではない。周知のごとく、1880年代中頃にエンゲルスは、労働者階級が労働貴族 (an aristocracy among the working class) と多数の労働者大衆 (the great mass of working people) に分裂していることを明瞭に認識し、1848年以降、両者の間には生活水準 (貧困, 生活不安) の推移に著しい差異があったことを指摘した。エンゲルスは、『イギリス労働者階級の状態』のドイツ語版序文で、つぎのように書いている。「永続的な向上は、労働者階級のうちの二つの保護された部隊にしか見いだされない。第一は、工場法によって保護された工場労働者である。……彼らの状態は、1848年以前よりたしかによくなっている。」第二は、機械工、大工・指物師、レンガ積み工の大きな労働組合であり、「彼らの状態は、1848年以来たしかにいちじるしく改善された。そのなによりの証拠は、この15年以上ものあいだ、彼らの雇い主が彼らにたいしてひどく満足してきただけでなく、彼らもまた彼らの雇い主にたいしてひどく満足してきたことである。彼らは、労働者階級中の貴族を形成している。彼らは、比較的快適な状態をかちとることに成功し、そしてこの状態を最後のなものとしてうけとっている。彼らは、リオン・リーヴァイ氏やギッフェン (そしてまた俗物のルヨ・ブレンターノ) 氏らの言う模範的労働者であり、また彼らは、実際、特殊的にはものわりのよい資本家のひとりひとりにとって、一般的には資本家階級にとって、たいへん感じのよい、扱いやすい連中である。」⁽¹⁰⁾

一方、マルクスは、確かに、労働貴族概念を分析用具としては殆んど使用していない。『資本論』でもその概念は殆んど使用されず、数少ない例外の一つは、第1巻23章「資本主義的蓄積の一般法則」の5の(d)「恐慌が労働者階級の最高給部分に及ぼす影響」のなかでのつぎの叙述である。「本来の農業労働者のことに移る前に、一つの実例によって、恐慌が労働者階級の最高給部分にたいしてさえ、労働者階級の貴族 (Aristokratie der Arbeiterklasse) にたいしてさえ、どんな影響を及ぼすかを明らかにしておかなければならない。」⁽¹¹⁾そこでは労働者階級の最高給部分が、労働者階級の貴族と等置されている。そして、具体的例証として、『モーニング・スター』の通信員の報告を引用しながら、1867年恐慌がイングランドの最高賃金を取得していた熟練労働者のある部分を貧困状態に陥し入れたことを示す。「ロンドンの東部のポプラー、ミルウォール、グリニッチ、デットフ

注 (10) F.エンゲルス『『イギリスにおける労働者階級の状態』の1892年ドイツ語版への序言』(『マルクス=エンゲルス全集』(以下『ME全集』と略す) 2巻, 大月書店), p. 674.

(11) K.マルクス『資本論』第1巻(『ME全集』, 訳, 23 b巻), p. 871.

ォード、ライムハウス、キャニング・タウンの諸地区では少なくとも15,000人の労働者がその家族を含めて極度の窮乏状態にあり、そのうちには3,000人以上の熟練労働者がいる。彼らの貯えも6か月から8か月の失業のためになくなってしまった。……この一つの救貧院だけで7,000人が救助を受けていたが、そのうちの何百人かは6か月か8か月前にはこの国の熟練労働の最高の賃金をとっていた人々だった。⁽¹²⁾ マルクスは、恐慌が労働貴族でさえ、貧困状態につき落すことを指摘している。この指摘は重要であるが、マルクスが労働貴族概念を『資本論』で意識的に採用したとはいえない。これは、資本主義的生産様式の運動法則を提示することを目的とした『資本論』が、抽象度の高い論理レベルで労働者階級を単一の階級として捉えたこと、さらに、その前提として、熟練労働者は技術革新や恐慌を契機として不熟練労働者層に転落していく傾向は必然的であるとみなしたことに帰因していよう。同時代人たちが労働階級 **working class** ではなく労働諸階級 **working classes** という用語を使用していたとする A.ブリックスの⁽¹³⁾ 研究、マルクスの三階級区分に代って五階級区分の必要性を提唱した R. S. ニールの⁽¹⁴⁾ 研究を引きあいに出すまでもなく、三階級区分、即ち、労働者階級均質論をそのまま歴史分析に適用したならば、それは誤った方法といわざるをえない。マルクス自身も、歴史分析では労働者階級均質論にたっていたわけではないのである。

マルクスとエンゲルスは、1848年の大陸における革命の敗北、イギリスにおけるチャーティズムの敗北(4月10日)、それにつづく1850年代の「新型組合」の創設(典型的には合同機械工組合—**Amalgamated Society of Engineers**, 以下 **A. S. E.** と略す)にみられる労働組合運動の右傾化のなかで、「労働貴族」の用語を使用した。マルクスとエンゲルスの共同執筆とされる「評論」(1850年5～10月)は、「最近六か月の政治運動は、その直前のそれとは本質的に違っている。革命党はいたるところで舞台から追いはらわれ、勝利者は勝利の果実をめぐる争っている」という書き出しで始まり、⁽¹⁵⁾ チャーティストのファーガス・オコナーが労働貴族と結びついていることをこう批判する。「チャーティスト党のこれまでの組織も同様に解体しつつある。まだ党内にいる小ブルジョアは労働貴族と結びついていて(傍点引用者)、純然たる民主主義分派を形成している。その綱領は人民憲章およびその他若干の小ブルジョア的改良にとどまっている。真にプロレタリア的な条件のもとで生活している労働者の大衆は、チャーティストの革命的分派に属している。前者の先頭に立っているのはファー

注(12) 『同上書』, p. 872.

(13) Asa Briggs, *The Language of 'Class' in Early Nineteenth-Century England*, in A. Briggs and J. Saville eds., *Essays in Labour History*, vol. I, 1960.

(14) R. S. Neale, *Class and Class Consciousness in Early Nineteenth Century England: Three Classes or Five?*, *Victorian Studies*, 12(1), 1968. ニールは, Upper Class, Middle Class, Middling Class, Working Class A, Working Class B の五階級モデルを提示している。

(15) 「評論」[1850年5～10月](表題をもっていないが、『新ライン新聞、政治経済評論』2号, 4号および5・6号合併号に載った。『ME全集』, 訳, 7巻, p. 431)

ガス・オコナーであり、後者の先頭にあるのはジュリアン・ハーニーとアーネスト・ジョーンズで
⁽¹⁶⁾
 ある。」

オコナーと中流階級提携派(全国チャーター連盟)は翌1851年1月マンチェスターで会議をひらくが、運動の主導権はジョーンズ、ハーニーに確保され、同年3月末日から数日間ロンドンで開催された「チャーティスト・コンヴェンション」で社会民主主義綱領⁽¹⁷⁾を採択した。この綱領は、思想史上では大きな意義をもつが、運動の再生には余り貢献していない。間もなく、ハーニーが新設のA. S. E.の指導者ウィリアム・ニュートンに接近したのに対し、ジョーンズは、A. S. E.やA. S. E.とキリスト教社会主義者の企てた生産協同組合を「労働貴族」の組織として激しく批判し、ハーニーとジョーンズは訣別する。⁽¹⁸⁾

マルクスとエンゲルスは、ジョーンズを擁護した。エンゲルスは、1852年3月18日付マルクス宛書簡で、つぎのように書いた。「ところで、老オコナーが決定的に気違いになってしまった今では、ジョーンズがすっかり調子を上げているのはまったく当然だ。今が彼にはチャンスなのだ。……ジョーンズはまったく正しい道を進んでいる。そしてわれわれはおそらく次のように言うことができるだろう。彼は、われわれの理論なしには、正しい道にはいらなかったであろう、と。」⁽¹⁹⁾

マルクスとジョーンズの関係は、1847年末から1858年の間は比較的良好な関係にあった。マルクスは、「イギリスの党の最も卓越した指導者であるわれわれの友人アーネスト・ジョーンズ」⁽²⁰⁾と高く評価している。しかし、ジョーンズに全幅の信頼をおいてはいなかったようである。マルクスはエンゲルス宛の書簡のなかで、「個人的には彼(ジョーンズ)をはめるようなことは別はないのだ」⁽²¹⁾

注(16) 『同上書』、訳、p. 455。

(17) 「チャーティスト運動綱領」(1851年)は、全文が、都築忠七編『資料イギリス初期社会主義 オーエンとチャーティズム』、1975年、平凡社 に収録されている(pp. 461~67)。

(18) 都築忠七編『同上書』、pp. 452~3 の解説。

(19) 『ME全集』、訳、28巻、p. 32。

(20) John Saville, *Ernest Jones: Chartist*, 1952. の Introduction, とくに、pp. 46~7. ジョーンズ伝の序文(p. 70)とジョーンズの著作の選集であるこのサヴィルの編著書は、依然として貴重な業績であるが、その不備を補うものとして、新たに発見した書簡などの第一次資料に基づいて書かれた詳細な研究、古賀秀男「アーネスト・ジョーンズの追憶と評伝——チャーティスト研究」(『山口大学教養部紀要』、15巻、1981年10月号)が発表されている。古賀は、その論稿で「……1847年末~1858年には彼(ジョーンズ)はマルクス・エンゲルスらと親交があり、この時期のジョーンズらの運動路線ならびにマルクスらの路線は、両者の緊密な関係を正確に視野に捉えてはじめて正しく理解しうるのである。それはマルクスらの革命理論の一方的な直輸入ではなく、またマルクス側にも深い感化・影響を与えたのである。ジョーンズの立場は、強圧的な軍隊がなく庶民院が圧倒的優位をもつイギリスでは、秘密組織による暴力革命ではなく、議会(庶民院)を土台にし公開の大衆運動の力によって人民憲章を獲得して人民の統治権(人民主権)を確立し、内戦なしに『革命』を実現しうるというイギリス型『革命』を推進しようとしたものであった」(p. 53)と書いて、マルクス・エンゲルスに対するジョーンズの相対的独自性を指摘している。

(21) マルクスのヨーゼフ・ヴァイスマイヤー(在ニューヨーク)宛、1852年1月1日付書簡(『ME全集』、訳、28巻、p. 11)。

(22) が……」と書いているし、また、「E. ジョーンズはどこまでも利己的な小僧だ。彼は僕を二か月も彼の翻訳(彼の新聞(*People's Paper*—引用者)のための)の約束で愚弄した。僕のほうから彼はただ好意を受けただけだ。僕自身が金(かね)に困っているのに、僕は何日も彼といっしょに彼の新聞の金策のためにあちこちと引きずり回されている。……彼が利己主義者だということは、まったくそれでけっこうだ。だが、彼は文明的なやり方で利己主義者であるべきで、あんなばかげたやり方ではだめなのだ、と。とはいえ、この新聞はただ一つのチャーティスト機関紙なのだから、僕は絶縁はしないだろうが、ここ数週間は彼が独力でやってみるが⁽²³⁾いいのだ」と書いている。マルクスが、ジョーンズの機関紙 *Notes to the People* (1851年5月～1852年5月)と、それに続く *People's Paper* (1852年5月8日～1858年9月4日)に財政的援助を与えたのは、ジョーンズがチャーティズムを正当に継承しているとマルクスが判断したからであり、またその限りにおいてであったのである。マルクスは、ジョーンズに財政的援助をただけではない。ジョーンズの論説はマルクスが指導し、時には、じっさいには2人の共同執筆になるものが、E. ジョーンズの名前で *Notes to the People* に載った。1864年にインターナショナルの「創立宣言」を執筆するために *Notes to the People* を読み返した(と断定して間違いないと筆者は考えているが)マルクスは、エンゲルス宛に、「偶然、E. ジョーンズの *Notes to the People* (1851年～52年)の番号が再び私の手に入った。これらの号は、経済論説の主要な点に関する限り、私の直接の指導のもとに書かれ、また、部分的には私の直接の共同執筆である⁽²⁴⁾」と書いている。それ故、E. ジョーンズの1850年代初期の論説のなかにマルクスの見解が投影されているとみるものが許されよう。50年代初期のマルクスの労働貴族観を検討するために、筆者はマルクスの合同機械工組合と生産協同組合に対する評価を *Notes to the People* をも資料として検討するのは、この理由によるものである。

注(22) マルクスのエンゲルス宛、1852年9月23日付書簡(『ME全集』、訳、28巻、p. 118)。この書簡は、マルクスが、ハーニー、ホリヨーク、ハント、ニュートンを批判し、ジョーンズを擁護した理由を明確に示している。「ジョーンズのこと。個人的には彼をほめるようなことは別になのだが、先週は——危機到来というわけでもや彼が僕のところに押しつけてきたので——われわれの一大党とともに彼を助けた。ほかのやつらが二つか三つ集会を催したのだが、そこでは、『この集会は、アーネスト・ジョーンズ氏の関係しているどの民主主義運動の成功にも信を置くことができない、と信ずる』という決議がなされることになっていた。彼らはやつつけられた。しかも、したたかにだ。ばか者たちはまず金銭問題でジョーンズに恥をかかせようとした。これは失敗に終わった。次に彼らは、彼が『いろいろな階級のあいだの非友好的な感情』をかきたてるからとして——それだからこそわれわれは彼を支持するのだが——彼を攻撃した。すなわち、ハーニー、ホリヨーク、『リーダー』のハント、ニュートン(協同組合の)、その他有象無象が、一つの『国民政党』をつくるために結束したわけだ。この国民政党は普通選挙権は欲するが、チャーティズムは欲しない。』(『同上書』、p. 118)

(23) マルクスのエンゲルス宛、1852年9月2日付書簡(『ME全集』、訳、28巻、pp. 101～2)。

(24) マルクスのエンゲルス宛、1864年11月4日付書簡(『ME全集』、訳、31巻、p. 9、但し訳は筆者による)。エンゲルスは、「昨年12月にフランスのプロレタリアが比較的の不活発だった真の原因」を *Notes to the People* 1852年2月21日付、3月27日付、4月10日付で載せた。また、マルクスの論文「1848年11月4日に採択されたフランス共和国憲法」も1851年6月14日付で載せた。

2 「新型」労働組合に対する批判的見解

マルクスとジョーンズは、合同機械工組合(A. S. E.)を労働貴族の労働組合として支持せず、とくに機械工のストライキ(1852年)をチャーティズムから眼をそらせる改良主義として批判した。ウェップ夫妻は、19世紀第3四半期のイギリスの労働組合運動を「新精神と新型」“the New Spirit and the New Model”のそれとして特徴づけ、この時期は、1827年から42年に至る「革命的時代」とは一線を画し、「労働組合界が『新型』“a New Model”組織を採用し、そのもとで労働組合は財政的堅固さ、訓練された有給役員のスタッフ、および、従来みられなかった組合員の永続性を得た⁽²⁵⁾」時期と規定した。ウェップ夫妻が「新型組合」の典型例として重視したのが、1851年に成立したA. S. E.である。

「新型組合」は労働貴族の労働組合であった。組合の目的は熟練労働者の恒常的供給不足を創出することにより、かれらの賃金上昇を可能とし、その他の労働条件も有利に改善し、雇用主にたいし「対等」な地位を確保することにある。このような「新型組合」の方針は、古典派経済学の需給説、とくに賃金基金説によって基礎づけられたものであり、1840年代の不況により失業が産業循環から不可避免的に生じるといふ認識をえたこと、さらに、40年代のストライキが一連の苛酷な弾圧を受け、賃金上昇を実現するどころか労働組合の崩壊にまで導いたという経験が、ストライキに訴えるのではなく、労働供給を統制することによって自らの地位向上をはかるという方向に向かわせた。かれらは「ゲームの法則」を学び、「慣習から計算へ」(ホブズボーム)と19世紀中頃に大転換したのである。その労働供給不足を創出するために、六つの主要な政策、即ち、(1)徒弟規制、(2)地域間の労働移動統制、(3)生産規制、(4)移民の奨励、(5)労働時間の短縮、(6)超過労働の規制、が採用された。これらの政策を効果的に実施するためには、従来の地方的・分散的組合を全国的・統一的組合へと再編成しなければならない。失業した同業者が安価な労働力として販売されることを防止するために、その失業者の生活が保障されなければならないが、そのような失業給付のための基金は、組合費を週1シリングの高さにすることを要求し、したがって、組合員はその高い組合費を支払うことのできる熟練労働者に制限されざるをえなかった。つまり、労働貴族のみがその組合の構成員たりえたのである。蓄積された基金は全国組織の中央執行機関が管理せざるをえず、組織が巨大になるにしたがって専従の役員が必要となり、かれらはしだいに危険を伴うストライキにこの大きな組織をさらすことに消極的になり、“Defence not defiance”がかれらのモットーとなる。そして失業に対してだけでなく、疾病、老齢、死亡にたいする共済機能にますます重点がおかれるようになり、雇用主との対立・闘争は放棄され、体制内化した労働組合となっていく。専従書記は労働現場を離れ、雇用主との交渉に習熟していき、「プリミティブ・デモクラシー」は巨大な組織のなかで消失

注(25) S. & B. Webb, *History of Trade Unionism*, 1920 ed., p. 181. 飯田鼎・高橋沈訳『労働組合運動の歴史』(上), 1973年, 日本労働協会, p. 206.

していくのである。以上のようなウェブの「新型組合」論には幾多の批判が寄せられたが、筆者は、いくつかの修正をすれば、依然として有効なモデルであると考えている。⁽²⁶⁾

A. S. E.の組合員は、創立時(1851年)の5千人から、1860年の約2万人、さらに1870年約3万5千人、1880年約4万5千人へと急速に増加していき、専従書記としてW. ニュートンとW. アランが敏腕をふるった。設立当初よりA. S. E.では政治闘争は排除され、その運動方針はチャーティズムとは切断されていた。W. ニュートンは、「我々は、いかなる政治的事柄を我々の間では討議することも歓迎することも許さない⁽²⁷⁾」と明言した。ニュートンは、当初より、政治闘争を排除し、失業問題の解決を労働時間短縮と(後述する)生産協同組合の設立によって解決しようとしたのである。J. ハーニーが、このニュートンに近づき、E. ジョーンズとの対立をひき起こしたことは前述したところであるが、この対立は、1851年12月末日から機械工がストライキに入ると極めて激しいものとなった。⁽²⁸⁾ ストライキは、出来高賃金廃止と超過労働の廃止をめぐる開始されたものだが、翌52年1月10日、ロンドンとランカシャーの雇用主はロック・アウトでこれに応え、その結果、3千人の組合員とそれの約3倍の不熟練工たちが工場から閉めだされた。同年4月A. S. E.の執行委員会が敗北を認めるまでの3か月余の間、ロック・アウトが続いた。

注目すべきことは、ジョーンズも、そしてマルクスもこのA. S. E.のストライキを支持しなかったということである。ジョーンズは、1852年2月の*Notes to the People*で、A. S. E.に向かってつぎのように書いた。「低給職工は、自分たちを軽蔑してきた高慢な労働貴族(the haughty aristocracy of labour)に共感をよせていない。諸君のような高給職工はひじょうに利己的なので、直接痛みを感じないところまで手を差し伸べはしない。繰り返して言うが、雇用主たちは、(政治的団結に対しては——引用者)勇気をもって戦いはしない。かれらはストライキや協同組合に対抗することはできる。何故なら、諸君はそのための資金をもっていないが、かれらはもっているからだ。しかし、かれらは政治的団結に抵抗することはできない。何故ならば、かれらはそのための人数をもっていないが、諸君はそれをもっているからだ。」⁽²⁹⁾労働貴族を打倒すべき敵としたジョーンズは、続けてこう書いている。「我々は階級支配に対して闘うのだろうか? 我々自身の階級(ランク)の

注(26) ウェブの「新型組合」論に対する諸批判とその検討については、松村高夫「19世紀第3四半期のイギリス労働史理解をめぐる」(下)(『日本労働協会雑誌』, No. 225, 1977年12月号)を参照されたい。

(27) Select Committee on Councils of Conciliation, 1856. Evidence of W. Newton, quoted in J. B. Jefferys, *The Story of the Engineers, 1800-1945*, 1946, p. 33.

(28) 機械工のストライキ(1852年)については、Jefferys, *ibid.*, chapter II, および Social Science Association, *Trades' Societies and Strikes*, 1860, pp. 111-22 は古典的なもの。このストライキの原因を、ジェフェリーは超過労働と出来高賃金に反対したとする(*ibid.*, p. 38)のに対し、H. ベリングは不熟練労働者の雇用に対する熟練労働者の反対であるとする(*A History of British Trade Unionism*, 1963, p. 51)。この点については、Keith Burgess, *Trade Union Policy and the 1852 Lock-out in the British Engineering Industry*, *International Review of Social History*, vol. XVII, 1972, part III を参照されたい。

(29) *Notes to the People*, vol. 2, p. 861, quoted in John Saville ed., *op. cit.*, p. 193.

なかに階級支配があるのであり、我々はそれに対しても闘わなければならない。我々は貴族の特権に対して闘うのだろうか？ 高給職工の間に最も卑劣な型の貴族の特権があるのであり、我々はそれに対しても闘わなければならない。眞実は最良の政策である。他の貴族と同様に労働貴族は打倒されねばならない。もし諸君がそれをしないならば、諸君が民主制を樹立したとき、これらの人々が反動をしでかすだろう……⁽³⁰⁾と。ここには、ジョーンズの思想、即ち、A. S. E. のストライキは、人民憲章を求める政治闘争とは反対に、労働貴族の経済闘争であるから、労働貴族以外の労働者 = 低給労働者の支持を受けることはできず、闘争資金の欠乏もあって敗北を運命づけられているとした思想、さらに積極的に労働貴族は打倒されねばならないとした思想が表明されている。

機械工のストライキも敗北近くなっていた1852年3月に、ジョーンズは、やはり *Notes to the People* につぎのように書いた。「日毎にこの不運な組合は、その指導者たちの無謀な頑固さと先見の明のなさによって破滅へとひきづられている。……貧困な労働者仲間にたいして専断的な組合規制をもつこれらの独占的な『組織』と『組合』は、未曾有の抑圧的であり、不正義であり、専制的なものであった。それは、特権的であり貴族的である集団に入ることができないし、また許されもしない多数の人々の感情を離反させてしまった。それは、かれらの範囲外の人々に嫌悪された全ての貴族のなかで最悪のもの、即ち労働貴族の肥沃な温床となった。ひどい労働者過剰と並んで、このことのために、特権的カストの下のバリアを見下すようにひどく横柄にかれらを見下す傲慢な『兄弟たち』の地位を奪おうと熱望する多数の人々を、雇用主階級はみつけることができるのである。これは厳しい言い方だが、眞実である。……千人の組合員がいるか百万人の組合員がいるかには関係なく、すべての労働組合は嘆かわしい虚偽である (*lamentable fallacies*)。……我々はそれ故、こういう。——鉄工組合 (A. S. E. 一引用者) ——最も裕福で巨大で強大で良く組織されたなかの一つ——を見よ。それは意気消沈して横たわっている。貴族は破滅した——かれらの権力は消え去った——かれらの力は滅亡した——かれらの独占権は終息し、労働者過剰がその産業で生じた——かれらの高賃金の終止符である！ ——シリングきざみで賃金はひき下げられていくであろう。」⁽³¹⁾ このジョーンズの主張のなかには、熟練労働者の賃金引き上げをはじめとする経済闘争の意義の全否定がある。J. サヴィルの言葉を借用するならば、*Notes to the People* におけるジョーンズの主張は、「労働者階級運動全体のなかでの労働組合の決定的重要性をかれが理解しそこなかったという意味で、当時のかれの政治思想の弱点を示している。」⁽³²⁾ であるならば、前述したジョーンズとマルクス

注 (30) *Ibid.*, p. 862, quoted in Saville ed., *ibid.*, p. 194.

(31) *Ibid.*, p. 976, quoted in Saville ed., *ibid.*, pp. 194~5. (但し、サヴィルが収録しているのは引用した一部分である。)

(32) J. Saville ed., *ibid.*, p. 190. これを A. S. E. の側からみれば、「チャーティストの指導者アーネスト・ジョーンズは、若干の組織を1848年の破滅から救助すべく試み、かれの機関紙『ノート・ツー・ザ・ピープル』で機械工に特別の注意を払っているが、何ら印象づけることができなかった」(*Jefferys, op. cit.*, p. 33) ということになる。

の当時の関係から、マルクスもサヴィルのその批判を免れることができないだろう。機械工のストライキが開始されて2か月余り経った頃、A. S. E. を擁護するハーニーがジェラルド・マッシーに「技術工・活動的および協同的」を *Friend of the People* (1852年2月7日号, 第1号) に発表させると、ハーニーからそれを送付されたマルクスは、ただちにエンゲルス宛に、「大陸から吐きだされたちっぽけな大物たちのでたらめな宣伝係, ジョーンズの中傷者, 自分をほんとうの千里眼だと亭主に思いこませている女手品師の亭主, このマッシーに、ハーニーは一般的に組合の弁護論を、また特に合同組合(A. S. E. のこと—引用者)の弁護論を書かせているのだが、これは何号にもわたって連載されそうだ⁽³³⁾」と書いている。そして、同年3月、マルクスは、「あの愚かな機械工のストライキがたしかに恐慌のくるのを少なくとも1か月は遅らせている⁽³⁴⁾」(傍点—引用者)と書いたのである。

この書簡は、マルクスの当時の恐慌待望論との関連で注目する必要があるだろう。1852年2月頃、マルクスは52年11月～53年2月が最も有望な恐慌勃発期と予測しており、「この恐慌はたいしたものになるだろう。というのは、こんなに大量の各種の商品が市場に投げ出されたということは、これまで一度もなかったことだし、こんなに莫大な生産手段もいまだかつて存在したことがないから⁽³⁵⁾だ」と書いていた。だが、機械工のストライキの結果、「機械類は今では全然製造されていないに等しく、しかも非常に多くが求められている」状況になり、恐慌を遅らせたというのである。マルクスも労働組合運動の重要性を1850年代初期にはまだ把握していなかったことは否定しえない、と筆者は考える。

では、ジョーンズは、そしてマルクスは、労働貴族の構成員をどのように理解していたのであろうか。P. マカロックとS. レイが、「熟練労働者と高級職人」、および、「徒弟制を経験し一般労働者(レイバラー)よりも決定的に高い賃金を取得する一般職人」の二階層をミドルクラスに算入したのに反対して、ジョーンズは、この二階層は「労働諸階級 *working classes* に確実に属し、確かに労働貴族 *the aristocracy of labour* を形成しているけれども、本当のミドルクラスからも貧民からも明瞭に区別される⁽³⁷⁾」と書いて、労働貴族を構成するものを熟練労働者・職人とみていたことを黙示している。そして、労働貴族の賃金は、急速に切り下げられ、レイバラー・貧民層の水準に

注(33) マルクスのエンゲルス宛, 1852年2月4日付書簡(『ME全集』, 訳, 28巻, p. 15)。*Friend of the People* は、J. ハーニーの編集・所有になる *Red Republican* が名称を変更したもの(1850年12月16日より)。ここで第1号というのは、52年2月7日から同年4月24日(12号)まで続いたニュー・シリーズの第1号のことである。

(34) マルクスのエンゲルス宛, 1852年3月2日付書簡(『ME全集』, 訳, 28巻, p. 28)。

(35) 同上。52年11月初めになっても、マルクスは、「貧困と自由貿易—迫りくる商業恐慌」や「商業的熱狂の政治的帰結」で、恐慌の近いことを主張していた。

(36) 同上。また、1852年3月25日付のマルクスのヨーゼフ・ヴァイデマイヤー宛書簡では、「機械工の一部はやっと正気にかえり、ジョーンズに改悛の声明を送った」と書かれている。

(37) *Notes to the People*, vol. 1, p. 541. 労働貴族を構成する2階層を英語のまま書くと、「Skilled artisans and handicraftsmen of a superior description」と「Common handicraftsmen, or men living by the exercise of a craft which demands more apprenticeship, and demands wages decidedly superior to those of common labour」(*ibid.*, p. 511)である。

平準化されていくとみていたのである。ジョーンズはいう。「労働運動における恐るべき害悪は、高給者と低給者が互いに共感をもっていないことである。しかしながら、その一定の水準が見い出されるであろう。何故ならば、現存の体系のもとでは、我々は賃金平準化に向かっているからである。賃金は最低限にまで、即ち、極貧層にまず認められる水準にまで、高給者は順々に切り下げられるであろう。それ故、労働貴族にとって自分たち以下の諸階層の賃金の減少を阻止することが重大な利益になる。何故ならば、その害悪はかれらの上層からやってくるのではなく、下から上ってくるからである。⁽³⁸⁾ 労働貴族は転落していき賃金は不熟練労働者の水準に近づき、単一の労働者階級が形成される方向に向かう、これが1850年代初期のジョーンズの、そして、マルクスの労働貴族観であった。

3 生産協同組合に対する批判的見解

マルクスとジョーンズは、50年代初期には生産協同組合に対してもユートピア的であるとして反対した。生産協同組合は、キリスト教社会主義と「新型」労働組合の共同の産物である。キリスト教社会主義は、⁽³⁹⁾1848年のチャーティズムの敗北から生じ、労働者階級にチャーティズムの変革的闘争の代替物を与えることを目的としていた。通常、キリスト教の部分はF. D. モーリスに、社会主義の部分はJ. M. ラドロウに負っているといわれる。モーリスとラドロウは、機関誌 *Politics for the People* (1848) を刊行し、労働者との接触を求めたが、加えて、キリスト教チャーティストたち（とくにW. クーパー）とオーエン主義者たち（とくにロイド・ジョーンズ）との接触が、キリスト教博愛主義からキリスト教社会主義へと向かわせた。ラドロウは、フランスの協同組合の始祖ビュシェから強い影響を受け、B. ポッターは、*Co-operative Movement in Great Britain* (1891年) で生産協同組合の起源をオーエン主義に求めず、ビュシェの影響に求めたほどである。モーリスとラドロウの間には当初より見解の相違があり、このことが、1854年頃、比較的短命のうちにキリスト教社会主義が分解してしまう遠因となった。モーリスにとって、生産協同組合は、現存の社会の所有関係の廃棄を意図したものではなく、精神的覚醒、利己心の拒否、友愛の教育の場であったのに対し、ラドロウにとっては、それは資本主義にとって代る社会の基礎を提供するものであったのである。ラドロウは、パリの「労働者アソシエーション」をモデルにして、1849年秋に「労働者アソシエーション促進協会」*Society for Promoting Working Men's Association* を設立する。ビュシェの生産協同組合計画自体は、元来、「その資本は技術(スキル)であり、道具を使うが機械は使わない

注 (38) *Notes to the People*, vol. 1, p. 522, October 15, 1851.

(39) キリスト教社会主義については、C. E. Raven, *Christian Socialism, 1848-1854*, 1920. Torben Christensen, *Origin and History of Christian Socialism, 1848-54*, 1962. N. C. Masterman, *John Malcolm Ludlow: The Builder of Christian Socialism*, 1963. および、Philip N. Backstrom, *Christian Socialism and Co-operation in Victorian England*, 1974. を参照されたい。

アルティザン」に適用を限定していた。それ故、B.ポッターの指摘するように、「ビュシェのイギリスの信奉者が、機械使用によって転態していない産業で試みたことは自然であり重要である。」⁽⁴⁰⁾ 1850～53年にキリスト教社会主義者が設立した12の生産協同組合のうち、3つは裁縫業、3つは靴製造業、2つは建築業、他の4つはピアノ製造業、印刷業、鉄工業、パン製造業である。地域別には、ロンドンだけでなく、エディンバラ、グラスゴウ、リヴァプール、マンチェスター、ニューカッスル、サザンプトン、ノリッチ、アバディーン等で設立された。⁽⁴¹⁾ いずれも近代的技術をもって営まれる大工場ではないこと、さらに、競争原理が貫徹する社会における生産協同組合は、労働者の完全な自主管理権が付与されたにもかかわらず、内部から困難が生じ短命のうちに崩壊したこと、この2点は、後に検討するマルクスのインターナショナル「創立宣言」における生産協同組合評価との関連で極めて重要な点である。

ところで、A. S. E.のニュートンとアランがキリスト教社会主義者にかれらの組合の蓄積基金を最も有効に使用する方法について相談したのは、1851年初め、A. S. E.創立後間もない頃であった。かれらは、キリスト教社会主義者たちと共に、リヴァプールのウィンザー鉄工場を組合基金で購入し、それを協同組合工場にする計画をたてたが、それが実現する前に、前述した機械工のストライキが生じた。雇用主のロック・アウトという対応に直面して、A. S. E.は現存体制内での地位向上という考え方に疑問をもち、協同組合による代替を真剣に考えるようになった。52年1月6日、A. S. E.の各支部の90%の支持を得て、執行部は1万ポンドの生産協同組合の設立を決定した。ロック・アウトの長期化のもとで組合基金は枯渇するが、キリスト教社会主義者の資金援助を得て、V. ニールのいとこのA. A. ヴァンシタートがマイル・エンドに工場を確保し、52年3月6日⁽⁴²⁾の第一回株主会で、その工場は先のウィンザー鉄工場をモデルとすることが決定されたのである。

ストライキの敗北により、アランは生産協同組合こそが「そのような破局が再発する可能性を防ぐ唯一の方法である」と説くようになり、また、「我々は基金を蓄積するだけでは充分ではないこと、即ち、その基金を再生産的に使用することが必要であるということ」を学んだ。もしこの教訓が生かされるならば、数年にして労働者の所属するワーク・ショップで国中ちりばめられるであろうと⁽⁴³⁾、極めて楽観的な見通しをもって書いた。52年末、A. S. E.の代表者会議は組合規約を変更し、協同組合の促進を組合の目的の一つに掲げるようになる。A. S. E.の機関紙 *Operative* では、生産協同組合をめぐる活発な議論が行なわれたが、しかしその後は実際何も生じなかった。52年の

注 (40) Beatrice Potter, *Co-operative Movement in Great Britain*, 1891.

(41) 生産協同組合については、岡野昇一「労働者生産組合について」(『立教経済学研究』34巻4号, 1981年3月号)、道盛誠「協同組合株式会社」(渡辺佐平編著『マルクス金融論の周辺』, 1980年, 法政大学出版局)、松村高夫「ヴィクトリア中期の生産協同組合」(『ロバート・オウエン協会年報』, 8号, 1983年)

(42) Backstrom, *op. cit.*, pp. 42~3. Raven, *op. cit.*, pp. 250~54.

(43) *The Operative*, p. 394, quoted T. Christensen, *op. cit.*, p. 266.

機械工のストライキは、キリスト教社会主義者たちの間にも分裂をひき起し、モーリスは労使対立には関与しないとの立場を表明し、協同組合活動から離れ、「労働者コレッジ」 **Working Men's College** の初代学寮長として純粋に教育活動に専念しようとした。一方、ラドロウ、ヒューズ、ゴドリッチ等は労働組合運動で重要な役割を演じつづけることになる。A. S. E.のストライキ以後、生産協同組合が停止され進展をみなかった理由は、労働組合に財産所有権を認めない当時の法律が障害の一つになってはいたが、ヨリ主要な障害は、A. S. E.が前述のごとく50年代がすすむにつれて「新型組合」として確立していき、失業給付などの共済給付が充分可能となり、協同組合工場の設立により失業者を救済する必要がなくなったからである。そして、協同組合を目的とする事項は、50年代末までに組合規約から削除されたのである。⁽⁴⁴⁾

このような生産協同組合の設立に対し、ジョーンズは、*Notes to the People* 誌上で反対論をししばしば発表し、また、キリスト教社会主義者ニールの長文の協同組合賛成論を載せ、それとの間に論争をくりひろげた。当該誌上最初の協同組合批判論説で、ジョーンズはいう。「現在の協同組合制度は人民大衆に新たな害悪を与えるであろうし、また、協同組合の真の原則を根本的に破壊するものである。利潤追求の廃棄ではなく、それを再生する。競争に反対するのではなく、それを再確立する。(富の)集中を阻止するのではなく、それを更新する。——単に一群の俳優から他の群の俳優へと役柄を移しているにすぎない。現在の協同組合は、若干の新しい商人と資本家を古いのに入れ替えて創る制度であり、労働諸階級の大きなろい⁽⁴⁵⁾を、即ち労働貴族を増加させる制度である。」このなかで端的に表明されているように、生産協同組合が労働貴族を増加させるというのが反対理由の根幹であった。同様の見解は、ニールの長文の協同組合擁護の投稿(1851年10月28日)を批判したジョーンズのつぎの主張にも表われている。「私は常に現在の協同組合運動(その各々の傾向は完全に反社会的(ANTI-SOCIAL)である)は、極度に反動的(reactionary in the highest degree)であると言ってきた。あなたの主張からいかに私が正しかったかが、今や明らかだ。それは、労働貴族の集団がミドルクラスの舞台に上ろうとする試みにすぎない。——まず、最初に少数の貧民に支援され、かれらの肩に乗って上昇しようと目論み、それからかれらを下へ突き落とすのである。⁽⁴⁶⁾」この種の主張は *Notes to the People* に数多くに登場する。「現在の小土地保有運動と現在の協同組合運動は、地主と資本家が民主主義の迫りくる大海に対して築くことのできる最良の防護壁である。それらの運動は将来の反動の種である!! (THEY ARE THE SEEDS OF A FUTURE RE-ACTION !!)」⁽⁴⁷⁾

注(44) V.ニールは、機械工の間の協同組合工場の失敗の原因について、「私は職工がかれらの組合を成功させられなかった正確な理由は判らないが、当時の合同機械工組合の多くの人は、永続的に労働者としての彼等の地位を向上させる手段としての自主管雇用(self-employment)を信頼していたとは思わない」(B. Jones, *Co-operative Production*, 1894. p. 134, quoted Jefferys, *op. cit.*, p. 43)と記している。

(45) *Notes to the People*, vol. 1, pp. 29~30.

(46) *Ibid.*, vol. 1, p. 584.

(47) *Ibid.*, vol. 2, p. 646.

A.S.E.の生産協同組合の設立の試みに対しても、ジョーンズが反対したのはいうまでもない。52年3月にA.S.E.に向かって、「すべての協同組合の努力は、現在の統治制度の下では、時間と資力とエネルギーの浪費である。たとえ一地方で繁栄しても、それは短い間だけのことであり、古い害悪が新しい害悪にとって代っただけのことである。」⁽⁴⁸⁾と、ジョーンズは書いている。マルクスもこのようなジョーンズの協同組合批判を支持したのである。⁽⁴⁹⁾だが、1860年代になると、マルクスのこの見解は大きく転換することになる。

(経済学部教授)

注(48) *Ibid.*, vol. 2, p. 976.

(49) マルクスはエンゲルス宛に、こう書いた。「昨日、ジョーンズは、協同組合運動に反対し、公衆を正面攻撃をする本当に見事な演説をした。」(1851年5月5日付書簡)